

7世紀の日本都城と百済・新羅王京

小澤 毅

1. はじめに
2. 飛鳥・近江の諸宮と百済王京
3. 藤原京と新羅王京
4. おわりに

要 旨 白村江の敗戦後、日本が唐・新羅の侵攻の脅威にさらされるなかでおこなわれた北部九州や瀬戸内の防衛強化には、亡命百済人が大きく関与した。そうした状況は、首都であった飛鳥や近江についても同様であり、王宮を囲む羅城的な施設や烽、山城など局地的な防衛体制の構築には、亡命百済人の技術が用いられたと推定される。したがって、彼らが知悉していた百済王京——泗沘都城の形態や防衛体制が大きな影響を与えたことは疑いない。一方、藤原京は、日本が半島情勢への介入を放棄し、唐との通交も避けて、律令国家の建設に専心する過程で造営された。これには、従来のような局地的な防衛施設はともなわず、天皇を頂点とした律令国家の権力を誇示する機能が付与される。その構想から造営、遷都にいたる期間は、日本と新羅が緊密な外交関係を維持した時期に合致するものの、新羅王京と藤原京は、形態や設計原理のうえでも異なる点が多く、両者の間に直接的な影響関係は認められない。新羅が日本に積極的な通交を求めたのは、対唐政策上の理由からであったが、それは新羅を従属国とみる対外観を形成し、日本はみずから「小中華」とする華夷秩序の構築を図る。したがって、その威容を内外に誇示する舞台装置でもあった都城の建設にさいして、新羅王京を模倣したとは考えがたい。日本が範とし、国内で実現をめざしたのは、あくまでも中国の都城であったとみるべきである。

キーワード 白村江 飛鳥 近江 防衛体制 藤原京 都城 唐 百済 新羅 王京

1. はじめに

6世紀末にはじまる飛鳥時代に、日本（倭国）では、奈良盆地の南端近くに王宮が継続的に営まれた。推古朝の豊浦宮（592～603年）と小墾田宮（603～628年）、舒明朝以降の飛鳥岡本宮（630～636年）、飛鳥板蓋宮（643～655年）、後飛鳥岡本宮（656～672年）、飛鳥浄御原宮（672～694年）、そして持統朝以降の藤原京（694～710年）である。

これらは、天皇（大王）の代替わりごとに宮を移すという、いわゆる歴代遷宮の段階を脱して、宮室の位置の実質的な固定化、さらには恒久的な律令制都城の成立にいたる過程でもあり、宮都の歴史上、きわめて重要な位置を占めている。そして、それが東アジアにおける国際情勢と不可分の関係にあったことも疑いない。

では、飛鳥や藤原京など7世紀のわが国の都城¹に、当時密接な交流をもっていた百済や新羅の王京はどの程度の影響を与えたのだろうか。また、影響があったとすれば、どのようなものだったのだろうか。以下、はなはだ不十分ではあるが、この点について若干の私見を述べることにしたい。

2. 飛鳥・近江の諸宮と百済王京

飛鳥諸宮とその防衛施設 当時、飛鳥とよばれたのはさほど広い範囲ではなく、平地部分にかぎれば、南北1.6km、東西0.8kmほどの空間にすぎない。その北側は小墾田、南側は橘とよばれた地域であり²、小墾田には小墾田宮、橘には嶋宮が営まれた。また、飛鳥川をはさんだ対岸（西岸）には豊浦宮が存在したが、蘇我氏の邸宅を利用したと推定されるため、不備な部分も多かったらしい。600年に隋との国交が開始され、両国の間を使者が往還するようになると、推古はほどなく小墾田宮を造営して、603年10月にはそこへ移っている。これは、外国からの使者を迎えるのにふさわしい宮殿が必要となったとともに、豊浦宮はその条件を満たしていなかったことを示すものであろう。

一方、舒明朝以降の飛鳥諸宮は、宮号に「飛鳥」を冠するように、狭義の飛鳥の地に建設された。それらの宮殿の位置については論争があったが、1959年以来継続している発掘調査で、大きく3時期（Ⅰ期・Ⅱ期・Ⅲ期）に区分される宮殿遺構を確認し、飛鳥寺南方のほぼ同地に重複して存在したことが明らかとなっている。すなわち、出土する土器や木簡の年代からみて、Ⅰ期が飛鳥岡本宮、Ⅱ期が飛鳥板蓋宮、Ⅲ期が後飛鳥岡本宮と飛鳥浄御原宮に相当し、飛鳥浄御原宮は、後飛鳥岡本宮を継承・整備した宮殿と考えられる³。

こうした状況は、当時の宮殿がすでに天皇一代かぎりのものではなく、より長い年月にわたって維持されていたことをものがたる。実際、飛鳥板蓋宮は皇極・斉明の二代の天皇、後飛鳥岡本宮は斉明・天智・天武の三代の天皇、飛鳥浄御原宮は天武・持統の二代の天皇

が使用しており、7世紀中葉以降の大和の王宮は、火災によって一時的に移動した場合を除くと、実質上、この場所に固定していたといえるのである。

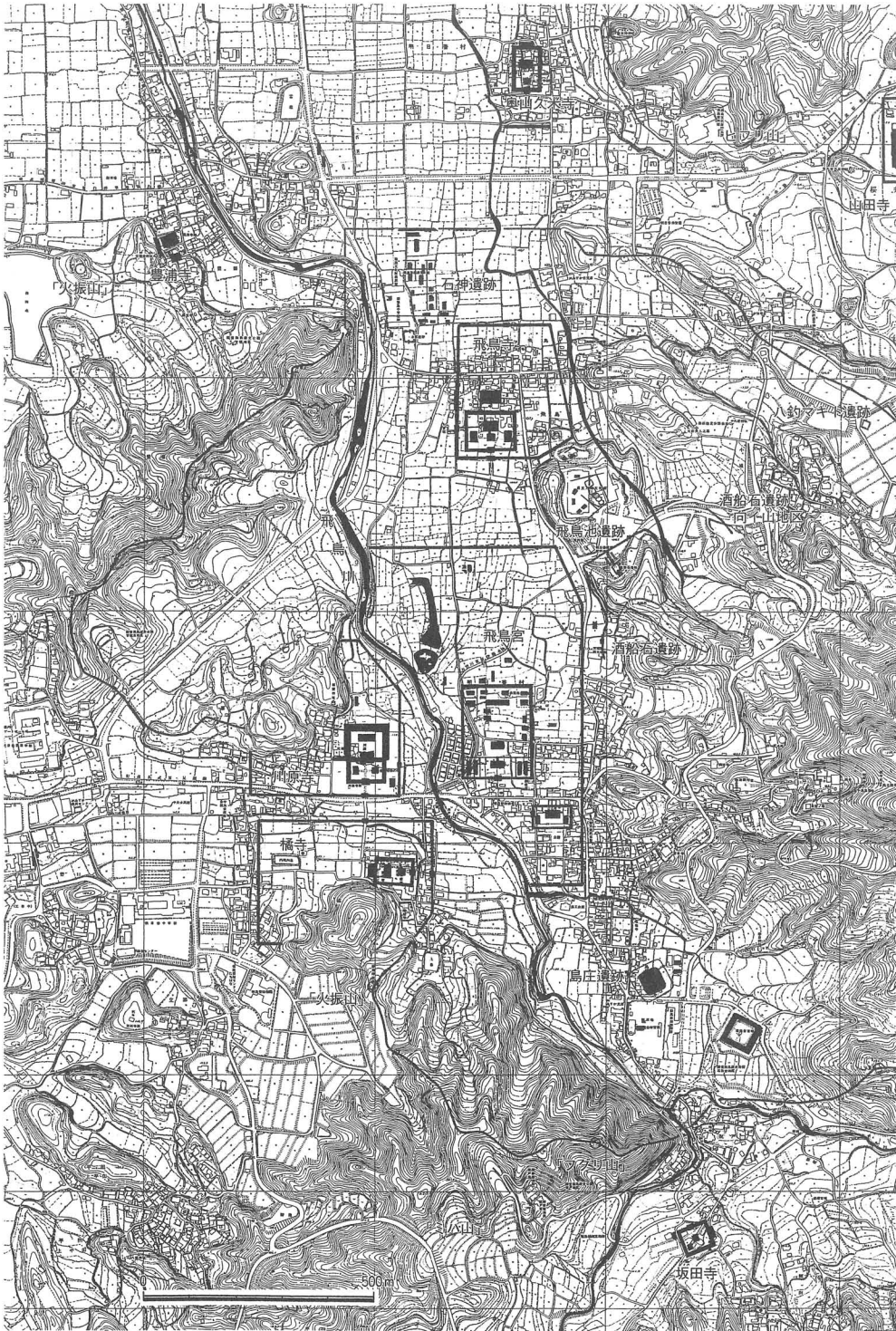
また、これらの東方の丘陵では、断片的ではあるが、尾根筋に設けた掘立柱塀が確認されており（酒船石遺跡向イ山地区・八釣マキト遺跡）、飛鳥の中枢部を守る羅城的施設としての性格が想定される。そして、当時の主要交通路のひとつであった紀路沿いで確認された「烽」（^{とぶひ}のろし台）の施設（^{もりかしたに}森カシ谷遺跡）や、飛鳥周辺およびその西方に広がる「ヒブリ山」の地名⁴などとあわせて、飛鳥地域をとりまく防衛体制が構築されていたことがうかがえる⁵。

ただし、王宮の位置がほぼ固定し、周囲に寺院や宮殿関係施設が累積していくことで、飛鳥の中心部は一種の都市的空間を形成していたとはいえ、それを囲む羅城のような施設が構築されたのは、以下に述べるように、後飛鳥岡本宮以降のことと考えられる。飛鳥岡本宮や飛鳥板蓋宮の段階には、遺構や史料のうえでも、そうした施設の存在をうかがわせる徴証は認められない。

両槻宮と「宮の東の山」の石垣 王宮の外に、羅城や山城にかかわる可能性がある「垣」を建設したことを記す著名な史料が、『日本書紀』斉明2年（656）是歳条である（以下、とくに典拠を示さない場合は『日本書紀』による）。すなわち、後飛鳥岡本宮の造営記事につづけて、^{たむのみね}田身嶺（多武峰）の頂上に垣をめぐらせ、^{ふたつきのみや}嶺の上に両槻宮を営んだことがみえる。そして、^{かぐやま}香山の西より^{いそのかみのやま}石上山にいたる渠を掘らせたこと、200隻の舟に^{そし}石上山の石を積み、「宮の東の山」に運んで、石を重ねた垣をつくったこと、時の人が謗って「^{たふれこころのみぞ}狂心渠」とよんだことが記される。

これらの記事に関しては、信憑性を疑う説もあったが、1992年に、飛鳥諸宮の東に位置する酒船石遺跡の丘陵で、壁面に砂岩切石を積みかさねた大規模な版築土塁の存在が確認され、それらの砂岩切石は、天理市の^{いそのかみ}石上・豊田周辺で切り出されたことが判明している⁶。さらに1997年には、その丘陵の西側から飛鳥寺の寺域東側にかけて、自然の谷川を人工的に改修した大規模な流路が存在することも明らかとなった⁷。この流路は、奥山廃寺（小墾田寺）の南から文武朝大官大寺の南辺および西辺をへて、香具山の西麓を北流する現在の「^{なか}中の川」にほぼ踏襲されていると判断できる⁸。「中の川」は、現状では小川にすぎないが、もとは幅25mほどの流路であったことがわかっており⁹、これが「狂心渠」にあたるのは確実といえる。斉明紀は事実を伝えていたのである。

ここで問題となるのは、両槻宮と「宮の東の山」の関係および、それぞれの性格であろう。けれども、本条における両槻宮の記事と、「宮の東の山」にかかわる記事は、明確に区別されており、両者を同一視することはできない。「嶺の上」つまり多武峰の稜線にあった両槻宮を、酒船石遺跡の丘陵上に想定する説は成立しえないと思う。



第1図 飛鳥地域の防衛施設の復元

また、関連して、田身嶺の頂上に垣をめぐらせたという記事を、酒船石遺跡の丘陵まで包括した大規模な山城の構築とする見解も示されているが¹⁰、発掘された土塁が山城の城壁としての体をなしていない¹¹こととあわせて、これをそのまま山城の造営に結びつけるのは無理がある。多武峰の稜線上の両槻宮を垣で囲み、酒船石遺跡の丘陵をめぐる垣（版築土塁）を築造したのは事実と考えてよいが、相互の位置関係からみても、それらは一連のものではなく、別個の施設と判断すべきであろう。とすれば、規模の点でも、本格的な山城造営とみるのはむずかしい。

そもそも、次に述べる660年の百済滅亡や663年の白村江の敗戦後はともかく、656年のこの時点で、わが国にそういった山城を構築するほどの危機感が存在したとは考えがたいのではなかろうか。

白村江の敗戦と危機意識 ところが、660年7月、日本が長年にわたり親交を結んでいた百済は、唐と結んだ新羅によって滅ぼされてしまう。斉明はすぐさま、百済救援（復興）のために軍備を整え、みずからも筑紫へ赴くが、661年7月にそこで死去する。そして663年8月、日本は白村江で唐・新羅連合軍と戦い、壊滅的な敗北を喫した。これによって、わが国は未曾有の国難に直面することになる。唐や新羅による直接的な侵攻が、いまや現実の脅威となったのである。

翌664年には、唐の百済鎮将劉仁願^{りゅうじんがん}によって、郭務棕^{かくむそう}が日本に派遣されてくる。朝廷は、皇帝の正使でないことを理由に入京を拒否したが、さらに665年、劉徳高^{りゅうとくこう}と郭務棕らが唐の高宗の使節として派遣されると、入京を認めざるをえず、日本からも唐へ使節を派遣することとなった。この遣唐使には、翌年正月に高宗が泰山でおこなった封禪^{ほうぜん}の儀に参加させるという目的があったとみられる。唐の侵攻を恐れる朝廷が、関係の修復にむけてとった措置であろう。

そして668年9月には、ついに高句麗が唐・新羅連合軍によって滅ぼされる（『旧唐書』、『三国史記』高句麗本紀ほか）。それは、日本にとって最後の防波堤の崩壊を意味しており、いつ侵攻を受けても不思議ではないという状況におかれることとなった。実際、『三国史記』によれば、唐は倭国を征伐するためと称して、船舶を修理しているのである（新羅本紀文武王11年7月26日条）。これは、実のところ新羅を攻撃するためと噂されたようだが、唐が本当に日本を攻撃しようとしていたかはともかくとして、この情報に接した朝廷が恐怖にかられたことは想像にかたくない。

こうした情勢のもとで、中大兄皇子は、668年正月の即位まで皇太子のまま政務をとり（天智称制）、防衛体制の整備に邁進する。その施策とは、北部九州から瀬戸内をへて畿内へいたる長大な防衛ラインの強化であった。まず664年には、対馬、杵岐、筑紫に防人^{さきもり}と烽をおき、筑紫に水城^{みづき}を築く。また、翌665年8月には、亡命百済人を派遣して、長門に1城、筑紫

に大野と椽の2城を築いた(ただし、この記事は670年にも重出)。さらに、667年11月には、大和に高安城、讃岐に屋嶋城、対馬に金田城を築いている。そして、一連の防衛強化策が遂行されているさなかの667年3月、都も近江大津宮へと移されることになった。この遷都については、いくつかの理由が推定されているが、前後の状況からみても、これらの施策と無関係ではありえない。最大の要因が、防衛上の問題にあったことは間違いないだろう。当時の朝廷は、それだけの危機感をもっていたのである。

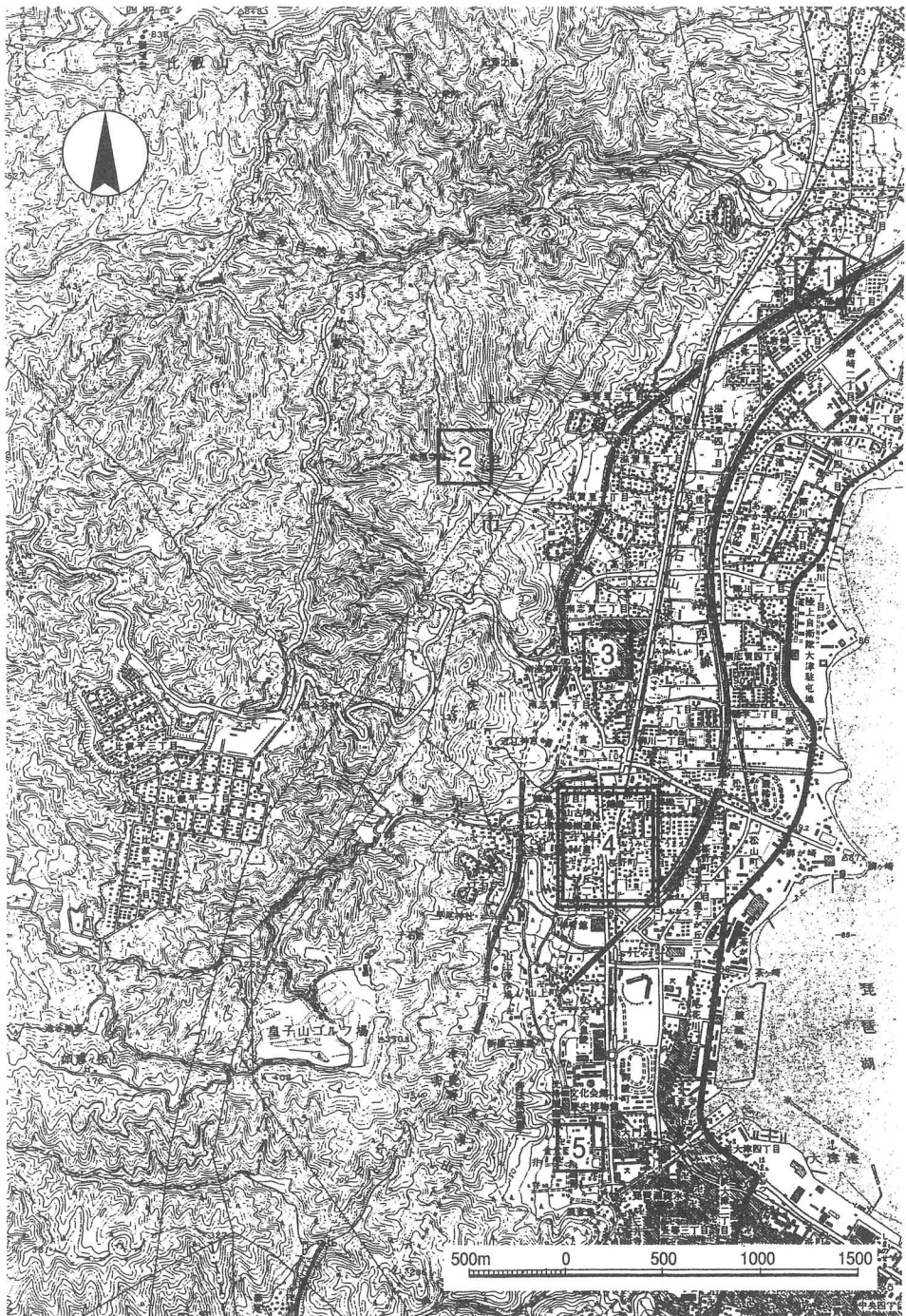
なお、上記以外のものも含めて、北部九州から瀬戸内にかけての地域では、数多くの朝鮮式山城が構築されている。それらには、軍事技術の専門家であった亡命百済人の関与が想定され、とくに大宰府をめぐる防御施設の存在形態は、百済の泗沘都城と共通した様相をみせる¹²。亡命百済人の協力なしには、こうした防衛体制の整備はなしえなかった¹³。

飛鳥の防衛体制 一方、近江遷都以前の大和でも、高安城以外に、飛鳥を中心とする防衛が構想・整備されたことは容易に想像される。結果的に近江への遷都が決断されたとはいえ、それまでの間、防衛強化に向けた一連の施策が実行に移されていくなかで、王権の中核であった飛鳥の防衛が等閑視されたとは考えがたいからである。ちなみに、近江遷都以前の天智称制年間の宮室について『日本書紀』にはとくに記述がないが、『扶桑略記』や『帝王編年記』が伝えるごとく、後飛鳥岡本宮が使用されたとみてよい¹⁴。したがって、飛鳥のなかでも、守るべき対象は、まず第一に後飛鳥岡本宮であったはずである。

そのように考えると、この宮の東方の丘陵上に設けられた掘立柱塀などの施設の意味があらためて注目される。不定形ではあるが、これらを、後飛鳥岡本宮を核とした飛鳥中心部を守るための羅城的な施設とする見解は、的を射ていると思う。そして、それは、白村江の敗戦後の軍事的緊張のなかで、国家規模の防衛体制として整備された「最終的な首都防衛システム」の一環をなすものであったと考えられる¹⁵。当然、そこには烽などの監視・伝達施設も含まれていたであろうし、また、飛鳥寺をはじめ、宮のまわりに数多く配された寺院や宮殿関連の施設は、有事のさいには防御拠点としての機能を果たすことができた¹⁶。これらが、全体として飛鳥の防衛になったものと推定される。

ともあれ、当時の国際情勢を勘案すれば、飛鳥におけるこうした防衛体制の構築が強く希求されたのは、少なくとも斉明朝前半ではなく、百済滅亡後、なかでも白村江の敗戦後のことと考えざるをえない。また、667年には近江遷都が実行に移され、飛鳥防衛の意義は著しく減少するので、遷都以前の天智称制年間の成立とみるのが至当であろう。

近江の防衛体制 一方、大津宮を中心とする近江の防衛体制はどうだったのだろうか。大津宮は広大な琵琶湖に臨む西岸の狭長な平地に立地したが、この地は飛鳥にくらべるといっそう防御に適した地形条件をそなえ、防衛体制にも充分に考慮が払われていた。その西側は急峻な山塊となり、南東は瀬田川が天然の防塞となっている。また、北方には三尾城



第2図 大津宮と周辺の寺院

- | | | |
|---------|------------|----------|
| 1. 穴太廃寺 | 2. 崇福寺 | 3. 南滋賀廃寺 |
| 4. 大津宮 | 5. 園城寺前身寺院 | |

が築かれ、これは壬申の乱の戦いの舞台ともなった。さらに、西方の山中に、大規模な包谷式山城の存在を想定する見解もある¹⁷。

そして、大津宮を取り囲むように、道路沿いの要所要所には、やはり寺院が占地していた。すなわち、湖岸の平地には、北に穴^あ太^{のう}廃寺と南^{みな}滋^{みが}賀^が廃寺、南には園^{おん}城^{じょう}寺の前身となる寺院があり、北西の山中には、山背の北白川へ通じる古道沿いに、崇^{すう}福^{ふく}寺が立地する。これらが、飛鳥の場合と同じく、大津宮を囲む防御拠点としての役割を果たしていたことは確実であろう¹⁸。

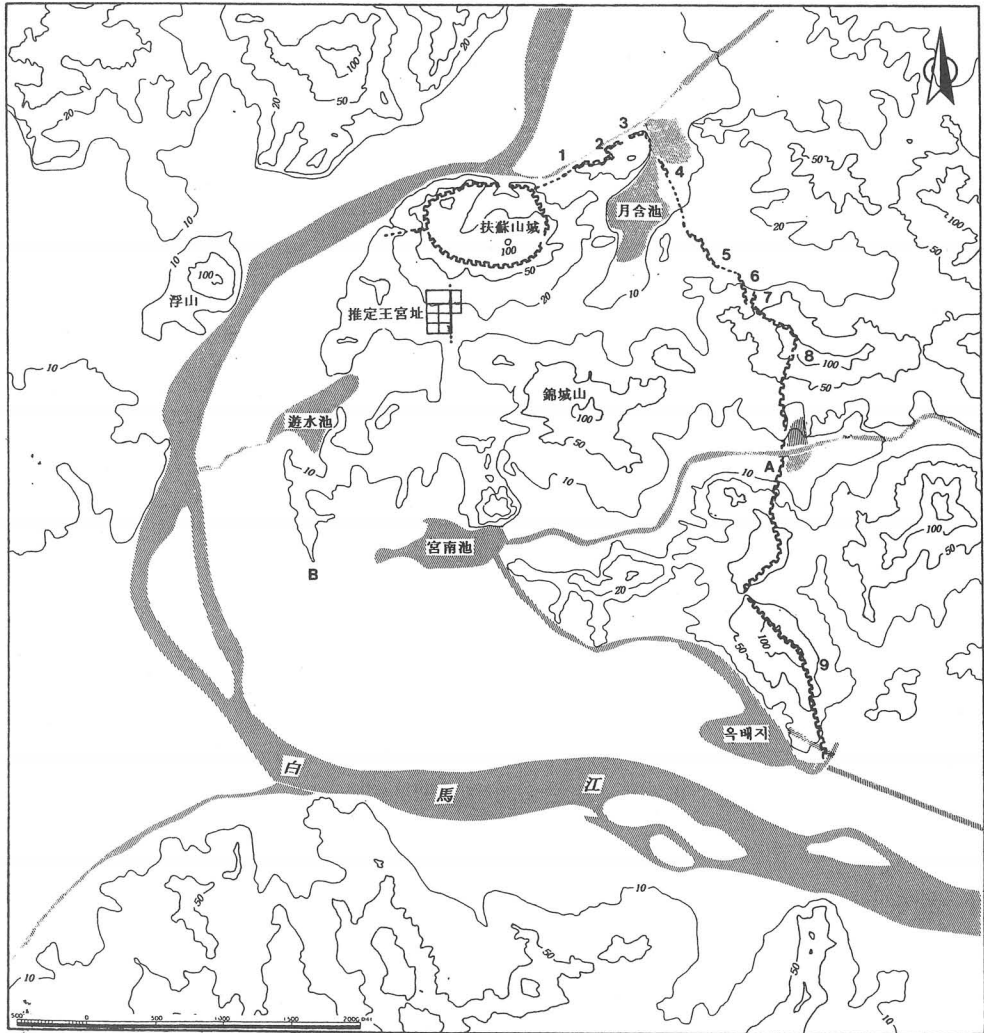
一方、それを空間利用という面からみると、山中の崇福寺は別として、ほかの寺院は、ただでさえ乏しい平地を占有して造営されたことになる。とすれば、防御の強化と相反するかたちで、朝廷の諸施設をおく空間は、とうてい充分には確保できなかったはずである。よって、この宮が飛鳥を凌駕するような施設を備えていたとは考えられない。大津宮の本質は、あくまでも防衛を第一とした仮設的な宮室であったと判断すべきである。

百済王京の影響 このように、日本は、白村江の敗戦により、唐・新羅の侵攻という軍事的脅威にさらされたなかで、防衛体制の整備に奔走した。これには、655年の長門と筑紫の山城造営が示すように、亡命百済人がきわめて重要な役割を果たしており、多くの朝鮮式山城が彼らのもつ築城技術によるものであったことは疑いない。

とすれば、それは山城にとどまらず、宮を中心とした防衛体制全体についても同様であったと考えるのが自然であろう。飛鳥では、後飛鳥岡本宮そのものは百済滅亡以前の656年の造営にかかるが、それを囲む羅城的な施設や烽などの防衛体制の構築には、亡命百済人の技術が用いられた蓋然性が大きいと思う。また、大津宮とその周囲の防衛体制は、白村江の敗戦後に計画されたものであり、その設計にあたって、彼らがもつ技術を積極的に活用したことは想像にかたくない。

実際、唐・新羅連合軍によって陥落した百済最後の王京である泗沘都城は、包谷式山城である扶蘇山城の南に広がる王宮を中心として、扶蘇山城から発した羅城がとり囲んでいる。ただし、南と西は白馬江（錦江）が天然の防壁をなしており、それに面した側の羅城は存在しなかった可能性が高い¹⁹。

これと飛鳥諸宮や大津宮との比較は、彼我の地形条件の違いもあって、そのままのかたちではむずかしいが、自然地形を除く基本的な構成要素には共通する部分が多い。当時の国際情勢と両国の密接な関係を勘案すれば、泗沘都城の形態が日本に大きな影響を与えたことは疑いないだろう。亡命百済人たちが知悉していた直近の防衛体制は、百済王京のそれであったはずであり、天智称制年間の飛鳥や近江における防衛体制の構築が、その直接的な影響下におこなわれたことは確実視してよいと思う。



第3図 泗沘都城の復元

3. 藤原京と新羅王京

半島情勢の転回 ところが、670年に入って、朝鮮半島的情勢は大きな転換をみせることになる。まず、高句麗の旧将が唐に叛旗をひるがえして、平壤におかれた安東都護府を攻撃する。そして、唐の半島政策に不満を抱く新羅がそれに同調し、唐占領下の旧百済領にも侵攻して、全面的な対唐抗争にふみきった。

もっとも、新羅王を都督として半島全体を支配下に組み入れようとする唐に対して、新羅の反発はこれ以前から高まっていたらしい。高句麗滅亡の直前にあたる668年9月には、あえて調を進める使者を日本に送っており、その後も頻繁に使者を派遣して接近を図ってい

る。戦勝国でありながら、そうした貢調形式をとってまで日本との国交回復に執着したのは、対唐抗争を控えた新羅側の戦略によるものとみてよい。強大な唐の軍事力を相手にするためには、背後の日本との結託、少なくとも日本が唐側につかないように布石を打っておくことが不可欠であったのだろう²⁰。事実、それ以後も、唐との対立的状況がつづく間は、新羅はわが国との親交関係を決して崩そうとはしなかったのである。

ともあれ、唐と新羅の抗争が、日本にとって歓迎すべきものであったことは間違いない。これによって、半島からの侵攻の危機は回避されたうえに、新羅側からの働きかけで修交がなされたのである。また、671年には、新羅と対立する唐からも、2度にわたって使者が送られてくる。このうち、11月に筑紫に到着した郭務棕の一行は、総勢2000人という大集団で、白村江の捕虜を送り届けたと推定されている。唐のこうした行動は、敵対関係となった新羅への対抗上、積極的に日本との修交を図ったものとみられる。

結局、日本はいずれの国に対しても援軍を送ることはせず、傍観的立場をとる。とくに唐に対しては、これ以後、約30年間にわたって正式な通交をおこなわず、消極的な姿勢に終始した。一方、新羅とは頻繁な使節の往還をおこない、通交関係の維持に努める。そして、676年、新羅は唐の勢力を朝鮮半島から駆逐し、半島全体の掌握をなしとげる。

飛鳥への還都 以上のように、670年に入ると、日本は白村江の敗戦後の危機的状況からほぼ完全に脱却した。それを端的に示しているのが、同年2月に天智が湖東の蒲生郡^{かもろ}に行幸し、宮を造営すべき地を視察した記事であろう。これは、防御を主眼とした仮設的宮室である大津宮がその役目を終えたこと、すなわち、半島からの侵攻の脅威が事実上去ったことをものがたるものにほかならない。しかし、天智は翌671年12月に死去し、結果として、近江にあらたな都が造営されることはなかった。そして、672年の壬申の乱で勝利を収めた天武は、大津宮を放棄して、飛鳥へ還都することになる。

天武はこのとき、9月12日にいったん嶋宮に入るが、3日後に後飛鳥岡本宮に移っており、同年冬には岡本宮（後岡本宮）の南における宮室の造営と遷居が記される。これが、686年に飛鳥浄御原宮と命名された宮殿であり、既存の後飛鳥岡本宮を継承・拡充するかたちで成立したものと推定される。おそらく、近江遷都以前に、後飛鳥岡本宮を中心として構築されたさまざまな施設も、そのまま受けつがれたのであろう。

藤原京の建設 ただし、このようにして成立した飛鳥浄御原宮は、とうてい天武朝の政治機構にとって充分なものとはいえなかった。そこで、王宮の周囲のかぎられた空間に、必要となる施設を点的に配する一方で、新都の探索が早い段階から開始される。そのさきがけとなったのは、676年の「新城」造都記事であり、以後、682年から684年にかけて、新都探索と巡行の記事が頻出する。

こうした一連の動きは、684年3月の「天皇、京師を巡行して宮室の地を定む」という記

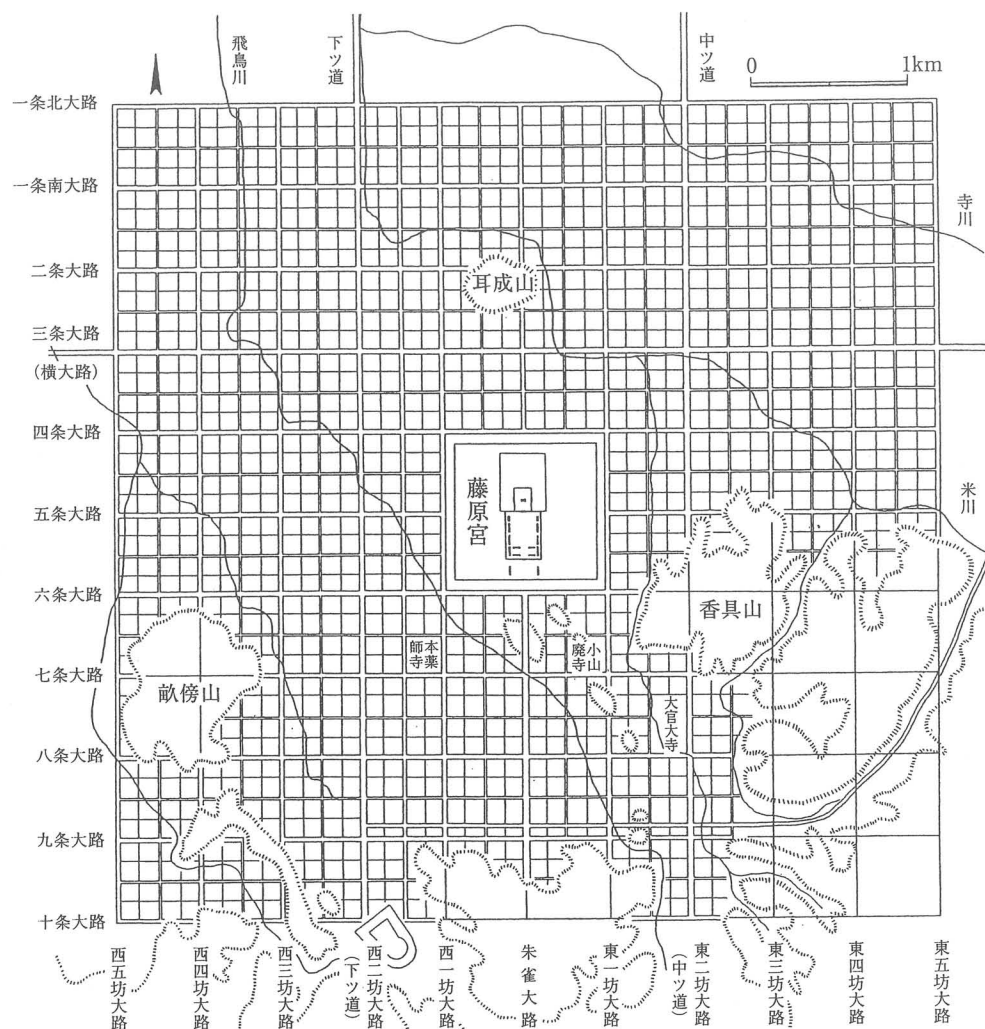
事をもって終わりを告げるが、この最後の「宮室」と「京師」が藤原宮・藤原京を指すことは疑いない。また、これにさきだっ見える「新城」が、同じく藤原京に該当することも確実であり、「新城」は、古い京に対する新しい都城の意味と考えてよい²¹。ただし、その造営は、天武の死去（686年）と葬儀、さらには皇太子草壁の早世（689年）のため、中断を余儀なくされる。そして、持統即位後の690年10月に再開され、694年12月の遷都を迎えることになる。

ちなみに、それにさきだつ683年12月には、「都城・宮室は一処にあらず。必ず兩参造らむ」という複都制の詔が出され、百官に難波で宅地をもらい受けるよう命じている。しかし、このわずか2年後の686年正月に難波宮は焼失し、天武自身も同年9月に死去してしまう。京域の整備には多くの年月を要する点を勘案すると、副都として位置づけられた難波京が、事実上、天武朝に都城として機能することはなかったであろう。実際、天武朝の難波京造営が未完におわった状況は、発掘調査でも明らかとなっている²²。日本の条坊制都城は、造営年代とそれが実質的に機能したという双方の点において、藤原京を嚆矢とみるべきである。

藤原京の形態 このように、藤原京はわが国ではじめての条坊を備えた都城として建設されたが、その京域については、1坊を4町（約265m四方）とし、南北12条（約3.2km＝6里）×東西8坊（約2.1km＝4里）と想定する復元案²³が、長く通説としての位置を占めてきた。しかし、1979年以降、この復元では京外にあたる部分からも、藤原京の条坊に一致する道路が次々と見つかり、宅地の状況も想定京域の内外でまったく差が認められないことが明らかとなる。

これによって、1坊が平城京以後の都城と同じく16町（約530m四方）であることは確実となり、その後、1996年の東西京極の確認で、京の東西幅は約5.3km（10里）と確定するにいたる。また、2004年には北京極とみられる道路が検出され、京の南北長もそれに近い広がりをもつこと、宮が京全体の中央か、少なくともそれに近い位置を占めることが判明している。養老令の戸令および職員令の条文²⁴や、南端の十条部分（右京十条二坊）の存在を強く示唆する「輕坊」木簡の存在²⁵を考え合わせれば、藤原京域は10条×10坊（10里四方）の正方形とみるのが妥当だろう。そして、藤原宮は正しくその中央に配置されていたと推定される²⁶。

なお、この京域が坊令の人数規定に合致するという事実は、京域を12条×8坊と復元する根拠そのものの消失を意味する。よって、それは基本的に当初からの設定にかかるものとみてよく、途中での縮小や拡大といった状況を想定する必要はない。大宝官員令別記の記載とあわせて、こうした京域は浄御原令制下以来の「京」であり、701年の大宝令施行後も変化しなかったと考えるべきである²⁷。



第4図 藤原京の復元（一部の条坊は模式図、条坊呼称は便宜的に平城京に準ずる）

ちなみに、藤原京の建設時や大宝令以前の段階では、なお京域が定まっていなかったとみる説があるが、成立しがたい。676年の「新城」造営は、結局、遷都までいたらなかったけれども、その範囲内の田は耕作されず荒廃したとみえるように、この時点ですでに、京の範囲が明確に設定されたことは疑いないからである²⁸。

藤原京の特質と限界 以上のような藤原京の形態は、以後の日本の都城とは大きく異なっており、時期の近接する中国都城にも類例をみない。注目されるのは、それが『周礼』^{しゅうらい}考工記^{こうこうき}の記述と多くの点で一致することである。藤原京のモデルは実在の中国都城ではなく、『周礼』に記されるような中国都城の理想型にあったと判断すべきであろう²⁹。

もちろん、そこには、現実の中国都城についての情報の不足が大きく関係していたこと

は想像にかたくない。遣唐使の派遣が669年から702年まで長期にわたって中断し、日本はその間、新羅を介した情報の伝播はあったものの、中国からの直接情報がほぼとだえななかで、律令国家の建設に邁進せざるをえなかった。このため、律令体制の確立に向けた諸施策を立案するさいに、都城の規範となるものはかぎられており、その中核となったのは、『周礼』および唐の永徽律令であつたとみられる。藤原京の造営は、これらの机上の知識にもとづいて計画され、実行に移された可能性が高い³⁰。

そうした条坊制都城の建設は、自然地形を利用した不定形の圍繞施設と山城をとまう従来の都城とは大きく一線を画するものであつた³¹。藤原京の外周をとりかこむ羅城が存在しない事実はそのひとつのあらわれだが、これまでのように局地的な防衛施設に依拠するのではなく、国家全体として、より広汎な防衛が図られるとともに、その中枢である都城には、天皇を頂点とした律令支配体制の権力を誇示するという機能が付与されるようになったのである。そして、それは、唐の強大な国力を目の当たりにした日本が、中国を規範とした国家体制の整備を急ぐとともに、その権威を表徴する構造物としての都城を建設する必要に迫られた結果にほかならなかつた³²。

ただし、藤原京は、それまでの王宮とは隔絶した規模と構造をそなえ、名実ともにはじめての都市の成立として位置づけられるものの、さまざまな限界も存在した。たとえば、平城京以後の羅城門や朱雀大路が、対外的にも国家の威容を誇示する舞台装置としての役割を果たした³³のにくらべると、藤原京には羅城門もなく、朱雀大路も貧弱といわざるをえない。こうした問題点が明確に認識されたのは、三十数年ぶりに再開された遣唐使の帰国報告に接した時点であろう。702年6月に再出発し、704年7月に帰国した大宝度遣唐使は、久しぶりに中国についての生の情報を持ち帰り、唐の長安城に関する最新の知見をもたらした。そこで明らかになったのは、藤原京と長安城のあまりにも大きな懸隔と、都城としての藤原京の欠陥であつたはずである。

そして、これが、ようやく完成を迎えつつあつた藤原京を捨て、新都の建設に向かわせることになる。710年に都となつた平城京では、構造上いくつかの重要な変更がおこなわれるが、それらはいずれも唐の長安城を明確に指向しており、平城京の構造が長安城の決定的な影響を受けているのは確実である。とりわけ、羅城門から朱雀大路をへて宮城へとつづく都の正面性が強調されている意義は大きく、律令国家がめざした都城の姿がそこに表出されているとみてよい。日本の条坊制都城の成立は藤原京に求められるが、それが唐長安城を規範としたかたちで完成を迎えるのは、次の平城京だったのである。

新羅王京とその影響 では、藤原京に対して、当時頻繁な交流のあつた新羅の王京はどの程度の影響を与えたのだろうか。

新羅は、建国から935年の滅亡にいたるまで、慶州を一貫して首都としたため、新羅王

京には多年にわたる遺構が複雑に累積している。その坊里（条坊）については、古くから遺存地割にもとづき、さまざまな復元がおこなわれてきた。また、1990年代以降は、皇龍寺近辺の計画的発掘調査の進展などとあわせて、そうした成果をとりこんだ、より実証的な復元案が提示されつつある³⁴。

それによれば、王京の坊里は単一の規格で施工されたのではなく、方位や方格の大きさを異にする複数の規格が存在したことが明らかである。実際、発掘調査でも、場所によって方格の規模が異なる事実が確認されている。このほか、道路については、幅員が多様なこと、たびかさなる改修を受けていることも判明した。これらは、新羅王京が全域にわたって同時に設定されたのではなく、当初は、王宮である月城や皇龍寺付近など、中枢部のかぎられた地域が整備されるにとどまり、時間の経過とともに拡大されていった状況をものがたる。ただし、各段階の坊里の範囲や拡大の時期と回数、それぞれの方格の設定原理については、なお見解の一致をみていないのが現状である。

一方、藤原京との比較という点でみると、藤原京が正方形の京城の中心に正方形の宮をおく、きわめて単純な求心的設計によっているのとは異なり、いずれの段階にあっても、月城の位置は王京の中心からははずれることになる。王京全体に対する月城の中心性は乏しいといわざるをえないだろう。また、かつては、月城と「北宮」に比定される城東洞遺跡の殿廊を結ぶ、中軸線としての朱雀大路が想定されていたが、そうした位置に大規模な道路は存在しないことも確認されている。

くわえて、近年の発掘成果の分析では、王京の最小行政区域を設定する坊牆と坊牆の間が、一定の間隔（「東魏尺」³⁵の60尺＝21.3 m、40尺＝14.2 m、20尺＝7.1 m）の道路敷地として確保され、それに宅地規模をあわせた長さが基本単位となって、王京の三段階の地割体系をなしたとする見解が示されている³⁶。これは、藤原京の条坊が、道路心を条坊計画線として等間隔（375大尺＝約133 m間隔）に設定され、道路幅員の差による宅地面積の不均等を生じているのとは、まったく状況を違えるものである。

以上のように、新羅王京の全体の形態や坊里の設定は、宮を中心とする簡明な設計原理が京城全体に貫徹していた藤原京とは異なる点が多く、両者の間に共通点は見出しがたい。そこには、新羅王京が多年におよぶ整備をへて成立したという経緯も関係しており、かつ長期間にわたって維持されたことも、藤原京との大きな相違点であった。藤原京は、「新城」の造営着手から2度の中断をへて、遷都まで約18年を要したとはいえ、その長さは、新羅王京で皇龍寺の創建から坊里の段階的整備に費やされた年月とはくらべものにならず、しかも遷都後15年あまりの短期間しか存続しなかったのである。

とすれば、たしかに藤原京の構想から造営、そして遷都にいたる期間が、ちょうど両国間に友好関係が保たれ、交流が盛んにおこなわれた時期と合致するとしても、藤原京に新

新羅王京の直接的な影響を認めることは困難であろう³⁷。たしかに、この時期の新羅は、対唐政策上の必要性から、あえて辞を低くして日本との積極的な通交を求め、日本もそうした関係の維持につとめた。けれども、それは、新羅ひいては朝鮮半島諸国を「蕃国」（従属国）とみる対外観の形成につながっていく。そして、日本は、新羅を唐風化の手本、情報や文化の伝達者として利用しつつも、これを朝貢国とみなし、唐を中心とした国際秩序を模して、日本を「小中華」とする華夷秩序の構築を図ることになる³⁸。

もちろん、それは、普遍性や客観性を欠く、多分に主観的な日本中心主義にすぎなかったし、真の帝国たる唐に対しては、朝貢というかたちでの通交を余儀なくされる。しかし、当時の日本が、新羅を一貫して従属国と位置づけようとしたことは疑いなく、こうした外交姿勢を勘案すると、「小中華」の威容を内外に誇示する舞台装置としての役割をになった都城の建設にさいして、新羅の王京を模倣したとは考えがたい³⁹。日本が範とし、国内での実現をめざした都城の姿とは、あくまでも、東アジア世界に君臨する中国のそれであったはずである。

4. おわりに

以上、7世紀の日本都城に対する、百済や新羅の王京の影響について論じてきたが、簡単に整理しておく。

白村江の敗戦後、日本が唐・新羅の侵攻の脅威にさらされるなかで、北部九州から瀬戸内をへて畿内へいたる防衛ラインが強化されるが、これには亡命百済人が大きく関与していた。そうした状況は、首都である飛鳥や近江についても同様であったと考えられる。王宮を囲む羅城的な施設や烽、山城などの局地的な防衛体制の構築には、亡命百済人の技術が用いられたとみてよい。とすれば、彼らが知悉していた百済王京——泗沘都城の形態や防衛体制が日本に大きな影響を与えたことは確実だろう。

一方、藤原京は、日本が半島情勢への介入を放棄し、唐との通交も避けて、律令国家の建設に専心する過程で造営された、はじめての条坊制都城である。これには、従来のような局地的な防衛施設はともなわず、国家全体として、より広汎な防衛が図られるとともに、天皇を頂点とした律令支配体制の権力を誇示する舞台装置としての機能が付与された。しかし、そのモデルは『周礼』考工記に記された中国都城の理想型にあり、そうした限界がこの都を短命に終わらせる結果となる。

藤原京の構想から造営、遷都にいたる期間は、日本と新羅が緊密な外交関係を保った時期に合致するが、新羅王京と藤原京は、形態や設計原理のうえで異なる点が多く、両者の間に直接的な影響関係を認めるのは困難である。また、対唐政策上の理由から、新羅が日本に積極的な通交を求めたことは、新羅を含む半島諸国を従属国とみる対外観の形成につな

がり、日本は、みずからを「小中華」とする華夷秩序の構築を図ることになる。したがって、その威容を内外に誇示する役割をになった都城の建設にさいして、新羅王京を模倣したとは考えがたい。日本がめざしたのは、あくまでも、真の中華たる中国の都城であったとみるべきだろう。

白村江の戦後処理に追われた天智朝（称制期間を含む）と、藤原京の建設に着手した天武朝は、年代的には連続するものの、直面する国際情勢には大差があり、それぞれの段階で希求された都城の形態やその規範、そして役割もまったく異なっていた。これは、そのまま、日本の国家体制整備の階梯差を示すものでもあったのである。

註

- 1 本稿では、井上和人氏の提言にしたがって、王宮を囲む不定形の羅城（的施設）や山城が存在した段階についても、都城の範疇でとらえることとする。井上和人「日本古代都城の出現と変質」『都市と環境の歴史学』第4集、中央大学文学部東洋史学研究室、2009年。井上和人「平城京へのみちのり－平城京造営の歴史的意義－」『月刊文化財』556号、第一法規、2010年。
- 2 千田 稔『古代日本の歴史地理学的研究』岩波書店、1991年、pp.205－218（初出1986年）。
- 3 小澤 毅『日本古代宮都構造の研究』青木書店、2003年、pp.19－71（初出1988年）。
- 4 岸 俊男『日本古代宮都の研究』岩波書店、1988年、pp.119－166（初出1970年）。
- 5 相原嘉之「倭京の“守り”－古代都市 飛鳥の防衛システム構想－」『明日香村文化財調査研究紀要』第4号、明日香村教育委員会、2004年
- 6 明日香村教育委員会『酒船石遺跡発掘調査報告書』2006年。
- 7 奈良国立文化財研究所『奈良国立文化財研究所年報 1998－Ⅱ』1998年、pp.52－57。明日香村教育委員会『明日香村遺跡調査概報 平成10年度』2000年、pp.71－75。
- 8 千田 稔『古代日本の歴史地理学的研究』（前掲註2）、pp.318－332（初出1981年）。
- 9 奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査概報 16』1986年、pp.5－28。
- 10 河上邦彦「両槻宮と酒船石北西の石垣について」『橿原考古学研究所論集 第十二』吉川弘文館、1994年。
- 11 西川宏・千田剛道・林直樹・梅崎恵司「西日本古代山城をめぐる諸問題－東アジア史の視点から－」『青丘学術論集』第10集、韓国文化研究振興財団、1997年。
- 12 岸俊男「日本都城制総論」『都城の生態』日本の古代 9、中央公論社、1987年。阿部義平「日本列島における都城形成－大宰府羅城の復元を中心に－」『国立歴史民俗博物館研究報告』第36集、国立歴史民俗博物館、1991年。小田富士雄「百濟熊津・泗沘期の都城制と倭－特に倭京～大宰府との関係について－」『古文化談叢』第49集、九州古文化研究会、2003年。
- 13 森公章『「白村江」以後－国家危機と東アジア外交－』講談社選書メチエ132、講談社、1998年、pp.167－168。森公章「倭国から日本へ」『倭国から日本へ』日本の時代史 3、吉川弘文館、2002年、pp.75－80。
- 14 小澤 毅『日本古代宮都構造の研究』（前掲註3）、pp.19－71（初出1988年）。
- 15 相原嘉之「倭京の“守り”」（前掲註5）。井上和人「日本古代都城の出現と変質」（前掲註1）。
- 16 小澤 毅『日本古代宮都構造の研究』（前掲註3）、pp.154－197。
- 17 阿部義平「日本列島における都城形成（二）－近江京の復元を中心にして－」『国立歴史民俗博物館研究報告』第45集、国立歴史民俗博物館、1992年。

- 18 古代寺院が防御拠点としての城郭的機能も有していたとする見解は数多く提示されている（安井良三「古代寺院と氏－初期寺院の城郭的性格の一面－」『日本書紀研究 第五冊』塙書房、1971 年。林博通『大津京』考古学ライブラリー 27、ニュー・サイエンス社、1984 年。小澤毅『日本古代宮都構造の研究』（前掲註 3）、pp.154－197。相原嘉之「倭京の「守り」」（前掲註 5）。甲斐弓子「わが国古代寺院にみられる軍事的要素の研究」雄山閣、2010 年）。一方、これを否定し、寺院の城郭機能や軍事施設への転用は 12 世紀以前には認められないとする見方もある（上原真人「平城京・平安京時代の文化」『古代史の流れ』列島の古代史 8、岩波書店、2006 年）。しかし、大津宮周辺に配置された寺院についていえば、当時の切迫した状況のなかで、かぎられた平地をさき、たんに仏教儀礼や僧尼修行の場としての一般的機能を果たすために、それらを配置するだけの余裕があったとはとうてい思われない。喫緊の課題である防御こそが優先されたはずであり、こうした寺院には有事の際の防御拠点としての機能も期待されていたと考えるべきだろう。
- 19 朴淳發（山本孝文訳）「百済泗沘都城の羅城構造について」『古文化談叢』第 45 集、九州古文化研究会、2000 年。小田富士雄「百済熊津・泗沘期の都城制と倭」（前掲註 12）。佐藤興治「百済の都城 王城」『古代日本と朝鮮の都城』ミネルヴァ書房、2007 年。
- 20 森公章『「白村江」以後』（前掲註 13）、pp.206－208。森公章「倭国から日本へ」（前掲註 13）、pp.84－85。
- 21 岸俊男『日本古代宮都の研究』（前掲註 4）、pp.271－306（初出 1975 年）。なお、「新城」については、地名（大和郡山市新木）とみる説や、平城京とする説もあるが、平城京を「新城」とよんだ例（『続日本紀』神護景雲 3 年（769）10 月乙未条）のほか、大宰府を「新城」と称した例（『日本書紀』持統 3 年（689）9 月己丑条）も存在するため、成立しがたい。
- 22 積山洋「古代都市難波京の諸段階」『巨大都市大阪と摂河泉』雄山閣出版、2000 年。積山洋「飛鳥時代の難波京をめぐる」『難波宮から大坂へ』大阪叢書 2、和泉書院、2006 年。
- 23 岸 俊男『日本古代宮都の研究』（前掲註 4）、pp.5－28（初出 1969 年）。
- 24 養老令の戸令および職員令には、4 坊に 1 人の坊令をおく、左京職に坊令 12 人をおく（右京職も同じ）、という規定がある。従来は、12 人という人数が京の条数を示すと理解し、それが平城京と合致しないことから、藤原京に関する大宝令の規定が残ったものとみて、12 条×8 坊という推定が導かれた。ところが、数のうえでは、坊令が所管する全体の坊数は $4 \times 12 \times 2 = 96$ 坊であり、10 条×10 坊の京城には、京職の管轄外である藤原宮の 4 坊が含まれるので、その分を引くと、96 坊という数が得られる。つまり、坊令が必ずしも東西に並ぶ 4 坊を管轄したのでないとなれば、10 条×10 坊の京城は律令の規定と完全に一致することになる。
- 25 奈良文化財研究所『飛鳥藤原京木簡 二 －藤原京木簡一－』奈良文化財研究所史料第 82 冊、2009 年、p.227。
- 26 小澤 毅『日本古代宮都構造の研究』（前掲註 3）、pp.201－238（初出 1997 年）。もっとも、上記の京城のすべてに条坊がしかれたわけではなく、大和三山をはじめ、香具山の南東に広がる丘陵地帯にも条坊は施工されなかった。すでに宮殿や寺院が集中していた飛鳥の中枢部とともに、地形的な制約のある部分では、施工について現実的な対応が図られたことがうかがえる。なお、そうした条坊の存在しない部分に関して、それを管轄する坊令の存在を疑問視する意見もあるが、律令の条文の性格上、人数規定はあくまで定数（最大数）を示すと判断すべきであろう。実際には、条坊の実情にあわせた坊令配置がおこなわれたとみて支障はない。
- 27 吉川真司「七世紀宮都史研究の課題－林部均『古代宮都形成過程の研究』をめぐる－」『日本史研究』第 507 号、日本史研究会、2004 年。
- 28 館野和己「古代都城の成立過程」『古代都城のかたち』同成社古代史選書 3、同成社、2009 年。

- 29 小澤 毅『日本古代宮都構造の研究』（前掲註3）、pp.201-238（初出1997年）。
- 30 これに対して、唐の情報自体は伝わっていたけれども、あえて『周礼』や伝統的な制度にこだわったとする見方もある（寺崎保広『藤原京の形成』日本史リブレット6、山川出版社、2002年、pp.87-96。佐川正敏「中国都城の発展史と古代日本への影響」『東アジアと日本の考古学』V 集落と都市、同成社、2003年）。しかし、帰国者や新羅を介して、ある程度の情報は得られたとしても、国交のない状態では、唐長安城の構造に関する詳細な情報を取得するのは、やはり限界があったのではないか。また、そう考えないと、大宝遣唐使の帰国後、時間をおかずに遷都が議せられた理由、そして平城京で構造的に変化した部分が、いずれも長安城を強く指向している理由が説明できない。
- 31 井上和人「日本古代都城の出現と変質」「平城京へのみちのり」（前掲註1）。
- 32 井上和人『日本古代都城制の研究－藤原京・平城京の史的意義－』吉川弘文館、2008年、pp.2-64。
- 33 今泉隆雄『古代宮都の研究』吉川弘文館、1993年、pp.242-257。
- 34 東 潮「新羅金京の坊里制」『条里制・古代都市研究』通巻15号、条里制・古代都市研究会、1999年。山田隆文「新羅金京復原試論」『古代学研究』第159号、古代学研究会、2002年。亀田博『日韓古代宮都の研究』学生社、2002年、pp.223-238（初出1993年）、239-247（初出1998年）。李恩碩「新羅王京の都市計画」『東アジアの古代都城』研究論集14、奈良文化財研究所学報第66冊、奈良文化財研究所、2003年。黄仁鎬「新羅王京の変遷－道路を通じてみる都市計画－」『東アジアの古代文化』126号、大和書房、2006年。黄仁鎬「新羅王京の造営計画についての一考察」『日韓文化財論集I』奈良文化財研究所学報第77冊、奈良文化財研究所、2008年。
過去の復元案については、山田隆文が簡潔にまとめている。また、発掘成果を含めた近年の研究状況や課題に関しては、以下の整理がある。趙由典「韓国都城研究の成果と今後の方向」『東アジアの古代都城』研究論集14、奈良文化財研究所学報第66冊、奈良文化財研究所、2003年。佐藤興治「新羅の都城 王京」『古代日本と朝鮮の都城』ミネルヴァ書房、2007年。高田貴太・庄田慎矢「朝鮮半島の古代都城－研究の今－」『考古学ジャーナル』第599号、ニューサイエンス社、2010年。
- 35 韓国の報告書や論文では、いわゆる高麗尺（＝大宝令大尺）あるいはそれにほぼ相当する尺として、しばしば「東魏尺」の語が用いられる。「東魏尺」は、『隋書』律曆志の「東後魏尺」（「東魏後尺」の誤り）を指し、『隋書』原文では、晋前尺の「一尺五寸八毫」にあたりとされる尺度である。この『隋書』の数値をそのまま用いると、実長は0.348mと算出され、そこから「東魏尺」を高麗尺ないしその源流とみる説が生まれた。しかし、『宋史』律曆志に引くところでは、「東魏後尺」の晋前尺に対する比率は「一尺三寸八毫」と記されており、この場合の実長は0.300mとなる（藪田嘉一郎編訳注『中国古尺集説』綜芸舎、1969年、p.27ほか）。前後の時代における中国の尺の実長から考えても、0.348mという長い尺が当時一般に通用したとは考えられず、『宋史』の記述に信をおくべきであって、これが現在の中国および日本を通じた定説となっている。したがって、「東魏尺」を高麗尺と同一視することはできない。なお、大宝令大尺・小尺をそれぞれ唐大尺・唐小尺とみて、高麗尺の実在を否定する見解があるが（新井宏『まぼろしの古代尺－高麗尺はなかった－』吉川弘文館、1992年）、度地にかかわる部分での大宝令の大尺使用規定や、和銅6年（713）2月19日の格によるその小尺への改定状況は、発掘遺構や現存建築のうえでも数多く確認できる。したがって、それらの規定が空文でなく実際に遵守されたこと、大宝令小尺が唐大尺であり、大宝令大尺がその1.2倍のいわゆる高麗尺にあたることは動かない（井上和人『古代都城制・条里制の実証的研究』学生社、2004年。小澤毅『日本古代宮都構造の研究』（前掲註3））。
- 36 黄仁鎬「新羅王京の変遷」「新羅王京の造営計画についての一考察」（前掲註34）。
- 37 藤原京や「新城」に、新羅の王京である慶州の影響を想定する説があるが（山中章「古代宮都成立

- 期の都市性』『都市社会史』新体系日本史 6、山川出版社、2001年。千田 稔『古代日本の王権空間』吉川弘文館、2004年、pp.117-125（初出1991年）、成立しがたい。
- 38 森公章『「白村江」以後』（前掲註13）、pp.206-215。森公章「倭国から日本へ」（前掲註13）、pp.129-131。
- 39 小澤 毅「古代都市」『社会集団と政治組織』列島の古代史 3、岩波書店、2005年。井上和人『日本古代都城制の研究』（前掲註32）、pp.2-64。浅野充『日本古代の国家形成と都市』校倉書房、2007年、pp.296-309、335-343。

挿図出典

- 第1図 相原嘉之「倭京の“守り”」（前掲註5）、p.79 第6図。
- 第2図 大津市歴史博物館編『近江・大津になぜ都は営まれたのかー大津宮・紫香楽宮・保良宮ー』サンライズ出版、2004年、p.68 図15。
- 第3図 朴淳發（山本孝文訳）「百済泗沘都城の羅城構造について」（前掲註19）、p.232 図面1。
- 第4図 小澤毅『日本古代宮都構造の研究』（前掲註3）、p.221 第20図。

7 세기 일본 도성과 백제·신라 왕경

小澤 毅 (오자와 츠요시)

요 지 白村江 패전 후 일본이 唐·신라의 침공 위협을 받고 있던 가운데, 북부 九州와 瀬戸内 방위 강화에는 망명 백제인이 크게 관여하였다. 그러한 상황은 수도인 飛鳥와 近江에 있어서도 같았으며 王宮을 둘러싼 羅城 시설과 烽燧, 山城 등 국지적 방위 체제 구축에는 망명 백제인의 기술이 쓰였을 것으로 추정된다. 따라서 그들이 知悉하고 있었던 백제 王京 — 泗泚都城의 형태와 방위 체제가 큰 영향을 주었던 점은 의심할 바 없다. 한편 藤原京은 일본이 한반도 정세에 개입을 포기하고 唐과의 通交도 피하면서 律令國家 건설에 전력을 다하는 과정에서 건설되었다. 여기에는 기존과 같이 국지적 방위 시설은 어울리지 않았고 天皇를 정점으로 하는 律令國家의 권력을 과시하는 기능이 부여된다. 그 구상으로부터 造營, 遷都에 이르는 기간은 일본과 신라가 긴밀한 외교 관계를 유지한 시기와도 동일하지만, 신라 王京과 藤原京은 형태나 시설·원리 면에서도 다른 점이 많으며, 양자 사이에 직접적인 영향 관계는 인정되지 않는다. 신라가 일본에 적극적인 通交를 요구한 것은 對唐 정책상의 이유였으나 그것은 신라를 종속국으로 보는 對外觀을 형성시켰으며, 이후 일본은 스스로를 '小中華'로 인식하는 華夷질서의 구축을 꾀한다. 따라서 그 위용을 안팎에 과시하는 무대 장치이기도 한 都城의 건설에 있어서 신라 王宮을 모방했다고 생각하기는 어렵다. 따라서 일본이 본보기로 삼고 국내에서 실현을 목표로 한 것은 어디까지나 중국의 都城이었다고 생각된다.

주제어 : 白村江 飛鳥 近江 방위체제 藤原京 都城 唐 백제 신라 王京

Walled Cities of Baekje, Silla and Japan in the Seventh Century

Ozawa Tsuyoshi

Abstract: In the wake of defeat in the battle of Baekgang, refugees from Baekje contributed significantly to the work, carried out under threat of attack from Tang China and Silla, of reinforcing the defense systems in northern Kyushu and Setouchi. Similar conditions prevailed at the capitals of Asuka and Ōmi, where technology of the Baekje refugees is inferred to have been used in building local defensive systems of palace walls, beacon fire stations, and hill forts. Accordingly, these refugees' thorough knowledge of the shape and defensive mechanisms of Sabi, the royal capital of Baekje, doubtless had great impact. On the other hand, the Fujiwara capital was built at a time when Japan had abandoned intervention in the Korean peninsula and severed diplomatic relations with Tang, while concentrating on the establishment of a centralized state based on the *ritsuryō* legal system. To that end the Fujiwara capital, unattended by traditional facilities for local defense, served to showcase the authority of the *ritsuryō* state with the emperor at its pinnacle. Based on this underlying concept, even though the period of its construction up to the time of the move to the Fujiwara capital coincided with one in which close diplomatic ties were maintained between Japan and Silla, the Fujiwara capital differs from the royal capital of Silla in many aspects of form and principles of design, and no relationship of direct influence can be recognized between the two. Whereas Silla eagerly sought diplomatic ties with Japan as part of its policy for resisting Tang, this fostered a Japanese view of Silla as a vassal nation, one which aimed at establishing a Chinese style *hua-yi* (tributary) system in miniature, with Japan at the center. Accordingly, in building the new capital as a stage upon which to flaunt its majesty both at home and abroad, modeling Fujiwara after the Silla capital is hard to imagine. Rather, the pattern which Japan sought to realize domestically should be understood as none other than a Chinese walled city.

Keywords: Baekgang, Asuka, Ōmi, defense systems, Fujiwara capital, walled cities, Tang dynasty, Baekje, Silla, royal capitals